

第7回南三陸町震災復興計画策定会議 議事録（概要）

日時：平成25年3月28日（木）13：30～15：30

場所：南三陸町役場歌津支所 2階会議室

出席委員（敬称略）3名

大泉 一貫（宮城大学副学長）

中林 一樹（明治大学大学院 特任教授）

平野 勝也（東北大学災害科学国際研究所 准教授）

欠席委員 6名

大橋 英寿（東北大学名誉教授）

越村 俊一（東北大学災害科学国際研究所 教授）

大塚 浩二（財団法人 漁港漁場漁村技術研究所調査役）

宮脇 昭（財団法人 地球環境戦略研究機関 センター長）

遠藤 信哉（宮城県土木部 次長）

桜田 昌之（国土交通省 東北地方整備局仙台河川国道事務所長）

町：町長・副町長・議長・東日本大震災対策特別委員会委員長、復興企画課長・復興事業推進課長・産業振興課長・建設課長・総務課長・保健福祉課長・環境対策課長 以下各課員

佐藤町長あいさつ

○ 震災から丸2年が経った。スピード感を持って事業を進めていきたい。本日は復興計画実施計画と復興祈念公園について考えたい。

大泉委員長あいさつ

○ 公園エリアについて議論していかなければならない。

○ 今年は目に見える復興が行われていくと町長の話にあった。復興計画に沿って事業が計画通り進んでいるようだ。

事務局

○ 資料説明①

大泉委員長

○ 事務局の説明について、質問等ご意見を頂きたい。

中林委員

- 復興計画もいよいよ本格的な復旧期に入る。大枠は決まったが、中身が決まっていない事業も多いのでは。これからどうしていくか課題も多い。
- 整備の事業費はついているが、維持管理も考えないといけない。急いで造るだけではダメで、10～20年後を考えないと。公営住宅など、次第に空きが出てくるだろう。集合住宅よりも戸建て住宅のほうが維持管理の観点からはよい。
- 事業が異なっても目的は重なってくるものもある。緑に配慮した住宅の建て方を考える。集落を新しく作るのだから、将来にわたって環境を守れるような仕組みを考えていくことが必要。
- 山の中にコンクリートがあるよりも、木造の戸建て住宅の方がよい。南三陸町らしい景観形成を考えなければ。エコビレッジづくりが海や産業基盤を守り、町の魅力に繋がっていく。
- 個別事業についてきめ細かい部分の議論をもっと続けていくべきでは。

大泉委員長

- 将来の町のありよう、人口減少と事業の関わりを考えていく。いろいろな意見を聞きながら、スピード感も必要。

平野委員

- 震災メモリアルを考慮してほしい。活用できる事業がないかもしれないが、公園事業に入れるなど工夫してほしい。
- 事業が多く、はっきりとした国の枠組みがない事業が漏れてしまう可能性がある。注意をしてほしい。

大泉委員長

- 600億円もの事業があるとそれを進めることがメインとなってしまう。
- 南三陸をどういうまちにするのかという大きなコンセプトを全事業共通で持つことが大切。南三陸の将来像とかけ離れる可能性もあり、気を付けてほしい。意識する仕組みも必要では。
- 今後はなりわいの場を考えていかないと、人口減少を引き起こしてしまう。
- 前を向いた産業政策を考える。漁業や農業の付加価値を上げ、産業政策を発展させる。
- 事業展開するうえで外部の意見を聞きながら事業を進めることも重要なことになってくる。

復興事業推進課長

- 公営住宅は、震災前に400戸あった。残ったのは138戸。が、耐用年数が過ぎたものが大半である。
- 今、災害公営は930戸で計画しているが、最終的には900戸以内に落ち着くと思われる。
- 入居予定者の50数パーセントは65歳以上の高齢者がいる世帯。今後空き室が増える懸念はある。空き発生した場合は公営住宅の住民を災害公営住宅に振り分けることも考えている。
- 更に進んだ段階では、用途廃止や福祉施設の導入なども考えていきたい。
- 1000戸の維持管理は町では経験がないので、指定管理者の導入や県公社への委託を考えている。

平野委員

- 公営住宅の割合は全世帯のどのくらいか。

復興事業推進課長

- 2割くらいである（1000戸／4500戸）

平野委員

- 通常の自治体は世帯数の5%を超えるとまずいと言われる。今は仕方ないが、今後も2割あると町の活力が下がるだろう。集合タイプはどのくらい。

復興事業推進課長

- 公営住宅の8割である。

平野委員

- 集合タイプが多いと問題はさらに大きい。集落をまとめて建てるということか。

復興事業推進課長

- 8つの地区になる。

中林委員

- 2戸1にして将来はファミリータイプにするといっても、隣り合って空室になるのは確立が低い。公営住宅の空きをうめられない。神戸は都市部で若年単

身層が流入してきたので状況はよかったが、南三陸では厳しいだろう。住宅の維持管理だけでかなり大変になる。

○ 空き家が出るのを前提にした計画をたてないと。ただ、家を提供しないわけにはいかないから、今から変えるのは難しいかもしれないが。

平野委員

○ 超長期的にみると高齢化に対応して拠点的に集めることもできる。最近は、子供が親元に戻って親の面倒を見たいが、同居ではなく近くに住みたいといったニーズが多い。

○ 将来世代交代の中で回転していくようなバッファーになるような土地を公営住宅という形で確保する。

中林委員

○ 町の2割の住宅が公営住宅というのは、かなり重たい維持管理費がかかる。

○ 公営の集合住宅は賃貸なら良いが、払下げとなると不満が出る。南三陸まで来てマンションを買いたくないという人も多いだろう。

○ 外部から戻ったり、ボランティアなどの縁で南三陸に住みたい人たちなど、将来を見越した公営住宅のあり方を考えるのも必要では。

○ 町としてはなるべく維持管理の負担を減らしていけるような、公営住宅は減っても人口は減らないような仕組みを考えていくことが必要では。

平野委員

○ 防集は被災した人を受け入れる仕組みだが、被災していない人を受け入れる仕組みも検討してほしい。新しい人が入れないのでは、町が元気になりようがない。

復興事業推進課長

○ 入居希望者の7割近くが2人以下の世帯である。世帯が大人数のところは戸建タイプだが少人数は集合タイプが増えている。木造で平屋となると土地確保に問題がある。

平野委員

○ 全ての防集住宅に戸建公営が入れられるとよい。

復興事業推進課長

○ 志津川市街地に集合住宅が多い。浜浜は土地の余裕があるが市街地はない。

平野委員

- 市街地はそれでもよい。

中林委員

- 法面が出ない造成がよいが防集の場合、土地に余裕がないので法面が出ることもある。そこは緑化が必要。塩害杉を活用した緑化の方法もある。

平野委員

- 不自然な緑化は最終手段。そうならないためにもしっかりと考えないといけない。将来別荘地として活用できない。

復興事業推進課 都計事業班長

- 資料説明②

平野委員

- コンセプトとして自然回帰はよい。インフラを破棄して維持管理が不要なものがよい。
- 政権が代わり、低平地の公園的な利用も認められるような傾向がある。
- 町が管理し続けるのは負担が大きい。自然回帰型で、町としては何もしない公園を作る。
- 海側はバック堤をやめてR45で防潮機能を持たせる。干潟にすれば管理はいらない。漁協と協力すれば潮干狩りなどもできる。
- 内陸側は里山的なゾーンで真ん中に祈りのゾーンの形はよい。
- 志津川登米線の線形は何とかならないか。

復興事業推進課 都計事業班長

- 志津川登米線はJRとの交差の関係でこのような線形となっている。
- 海側の部分はまち協公園部会でも平野委員の話したような案がいいとの意見が出ている。

中林委員

- 南三陸は海と山が原風景の町である。その機能を活かすためにも道路で防潮機能を持たせることが重要。
- 人工公園は維持管理が大変になる。町民のみなさんが公園を核にして絆をつくることのできるような公園がよい。

○ 震災祈念公園は町のためだけではなく、日本全体の祈念する場となる。

平野委員

○ 行政的なことでいうと、都市公園でやると守るべきものがないと難しいという議論になる可能性がある。代案として港湾区域に入れて港湾関連施設として整備することも考えられる。葛西臨海公園などがそう。

中林委員

○ 神戸のメリケンパークが該当するのでは。規模は違うがその事業スキームが参考になるのでは。

委員長

○ 全てのコンセプトは、記念碑祈りの場をどこにするか。どう整備して、その周辺をどうしていくかでは。

平野委員

- 各事業をどうデザインするかがキーになる。きちんとデザインすることで景観だけではなく工期を早めることになる。
- 実施設計をだれがやるかが重要。被災者、特に御遺族の思いをきちんと聞き入れながらデザインできる人でなければいけない。
- コンペは出来上がりの案で選ぶのでよくない。プロポーザルで選ぶべき。

中林委員

○ 土を盛って山をつくるのではなく、森が山になる。町の人が1人1本木を植えるなどの参加型でも森をつくれる。

町長

○ 28団地の森を切ってしまう。そういった形で何パーセントかの森を戻すことができればよい。

平野委員

○ 神聖なものは公園とし、それ以外のものは緑地にする。

大泉委員長

○ 神聖な場所をつくって、散策もできて祈りもできてというスペースになるのはよい。

平野委員

- 海の駅も漁港のそばにあるなど臨場感がなくてはいけない。せりなど観光客も見ることができ、一次産業そのものが観光資源となる。どこにでもある海の駅、道の駅にするべきではない。
- 病院、役場など集客施設を1か所にすべて集める。そこで車を降りれば歩いてどこにでも行けるようにする。全ての施設においてにぎわいという点で相乗効果が生まれる。
- その中で拠点となる施設があるとよい。バスなら交通拠点にもなる。
- 観光向け商店は漁港の近くに置き、それ以外は全部上にあがると持続可能性が高い。
- 低平地の利用にこだわって施設が分散すると持続可能性が低くなる。
- 県の指針が出ていないが、観光客向けのものは防潮堤の外にはつukれないのではないか。そこはうまく使い分けをし、月に一度の〇〇市など漁港のすぐそばでやれるものを考えていく。

大泉委員長

- 右岸のコンセプトとしては神聖と自然回帰。
- 自然的な土地利用エリアは農地的な使い方がよいだろう。農地ではないけど農業をやれるような。土手の中にハウスがあるなど集約的農業ができる。

平野委員

- 農地に戻すと低平地は小さな漁港でもいいことがいっぱいあるだろう。
- 市街地から農地に戻すのは事業メニューもなく、ハードルが高い。
- 工場型の農地もいい。しかし、被災自治体は同じように考えているのでやれる法人が少なく奪い合いになるかも。

佐藤町長

- 町が管理する面積は増える。20～30年後は人も減り、さらに管理する面積が増える。当然、財政的な負担も増える。これは極力避けたい。

大泉委員長

- 東団地に従来のまちの機能を集約するとコンパクトなまちになる。

平野委員

- 本来は集合団地に集めR45沿いにすべてあるのが理想的。しかし、役場や

病院の場所が決まっているなら、そちらに集めればよい。

事務局

○ 今後の策定会議については町民主体の委員構成で検討したい。住んでいる人間が計画の推進を考えていく会議にしていく。

平野委員

○ 行政主導で進めてきたのでバトンタッチは大きな課題。
○ 本当の意味でまちとして復興するには、住んで活動している人たちが自分たちのまちだと意識しなければいけない。

(今後について)

○ 防潮堤がキーとなる。1種漁港であれば防潮堤を作ることが必要かどうか。高台に移転したら本当に防潮堤があるのかどうか検討する必要がある。作っても作らなくても批判されるだろうが。
○ 低平地の利用をあきらめて高台への商業などの集約を考えてほしい。これからは都市デザイン。町民・役場・コンサル・学識を交えたプランづくりが必要だろう。
○ 個別の事業に対してどういう検討体制をとっていくのか大きな課題となる。個別事業にどうやって町民を交えていくのか、検討体制を考えてほしい。

中林委員

○ まち協などでいろいろ議論が進んでいるが、ポイントとなるテーマを考えていかなければいけない。
○ 大きなポイントは2つ。志津川と公営住宅。持続可能なまちづくりを進めるためにも維持管理を考えていくことが大事。
○ 町民が地区ごとに総合的な議論ができる場をつくっていく必要があるのではないか。それが新しくできる会議になってくれればいい。

大泉委員長

○ 今後は拠点をどこに持っていくのか。人口が減っていく中でコンパクトシティ、中心市街地をどのようにしていくのか。
○ 防潮堤の問題はしっかり議論していかなくてはいけない。長い歴史が関わってくる。
○ 事業を進める中でコンセプトを精査しなくてはいけない。
○ 今日のキーワードは祈りの場。統一感を持って進めていく。
○ 産業を強くしていかないといけない。産業再生。

○ 課題は多いが町民の方たちをふまえての議論を進めていってほしい。

佐藤町長

○ 3. 11で壊滅的な状態から委員のみなさんの力を借りてここまでやってこられた。復興計画は他市町村からも素晴らしいものができたといわれるものだ。これからが正念場であり、一工夫も二工夫もし、柔軟な考えをしていかなければならない。また、課題もいろいろと浮かび上がってきているので、30年、40年、50年後を考えたまちづくりをしていかなければならない。

○ 理念が必要だと感じる。国際防災都市として、あれだけの津波被害を受けながら、ここまで復活したと世界に誇れるようなまちにしていきたい。

以上_15:30 終了